The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	黒人作家の文学と思想の軌跡 : ラーフ・エリスンの場合
Author(s)	池上, 日出夫
Citation	大阪外大英米研究. 1988, 16, p. 27-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99121
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

黒人作家の文学と思想の軌跡
——ラーフ・エリスンの場合——

池　上　日出夫

(一)

アメリカの黒人作家ラーフ・エリスン(1914〜)は,『見えない人間』を1952年に発表し，同年に全米図書賞をうけた。この作家は，その後，アメリカ国内だけでなく，わが国も含めた世界各国で，広く読まれるようになる。アメリカで著名な黒人文学研究者であるロバート・ボーンは，1958年に,「エリスンは黒人を見えるものとして描きだすことにあざやかに成功している。『見えない人間』は，アメリカ黒人によって書かれた最良の作品であり，第二次世界大戦以後のアメリカの最良の小説であるといえるだろう」[1] とのべて，この作家を高く評価した。それから数年後，NAACP のハーバート・ヒルは「ラーフ・エリスンは全米図書賞を獲得したが，(それは) 黒人作家としてではなかった。グェンドリン・ブルックスはピュリッツァ賞を獲得したが，黒人詩人としてではなかった。そして，ラングストン・ヒューズは，全米文学芸術協会にアメリカ人作家として入会を許されたのである」[2] と書いた。つまり，ヒルは，1950年にブルックスが，そして1961年にヒューズが，それぞれ文学的業績を認められて,「アメリカ人作家」としての高い地位を獲得したように，エリスンも『見えない人間』によって，アメリカ文学の主流に合流することができた，と判断しているのであろう。ヒルは，さらにこんなふうにのべている。「今日，黒人芸術家は，現代文学の主流に入ると，新しい力を感じ，人種抗議あるいは過去の伝統的な黒人主題に制限されることを拒否する。自己憐憫と陰湿な激情は，もはやまったく必要ない。黒人作家が怒りを乗りこえると，文学的試練と抑制

をもとめる作家の仕事への新しい関心を育て，芸術とイデオロギーのより大きな世界へのかかわりをもとめるようになる」[3]。ここでヒルは，エリスンが「現代文学の主流」に合流しえた文学的条件をあきらかにし，『見えない人間』が，「自己憐憫と陰湿な激情」とけつ別し，「人種抗議あるいは過去の伝統的な黒人主題」を文学的に乗りこえているといっているのである。この点に関しては，たとえば南部の白人作家ウィリアム・フォークナーは，こんなふうにのべている。「偉大な才能をもったリチャード・ライトという作家がいた。彼は一冊のよい作品を書いて後に迷路にはいってしまった。彼は黒人と白人の相違にあまりにも関心をもちすぎ，作家であることをやめて黒人になったのである。もう一人のエリスンという作家は，才能があり，これまでのところ彼は黒人であることが最重要であるという考えから離れようとしており，いぜんとして作家である。彼は成功すると思う」[4]。これらの指摘であきらかにされているように，エリスンの『見えない人間』は，ライトの『アメリカの息子』(1940) や『アンクル・トムの子供たち』(1938) などの「抗議小説」の伝統的な黒人主題を拒否，あるいはそれと訣別することによって，最良のアメリカ文学の作品という評価をえたわけである。

エリスンは，全米図書賞を受けたとき，こんなふうにのべていた。「マーク・トウエーン以後のアメリカ散文から，ウイリアム・フォークナーの作品を除いて，ある重大なものがなくなってしまった。19世紀の作家たちは，民主主義の状態にたいして，はるかに大きな責任を負っていたし，実際彼らの作品は，合衆国憲法とその修正条項の神聖なプリンシプルが，人間の貪欲と恐怖，憎しみと愛の日常的要求とぶつかりあうとき，人間の心のなかに生じる葛藤を想像的にうつしだしたものであった」[5]。このような「重大なものをなくした」現代アメリカ文学の状況にたいして，『見えない人間』を書くことは，「19世紀アメリカの最良の作品を典型づけている民主主義にたいして，(作家としてのエリスンが) 個人として倫理的責任をとろうとすることへの回帰の試み」[6]であったのである。

アメリカにおいては，民主主義ににたいする作家の倫理的・文学的な責任観

念が，作品の優劣を決定する重要な条件の一つであったし，現在もそうであることは，エリスンの指摘するとおりである。ナサニエル・ホーソーン，ハーマン・メルビル，ラーフ・W・エマスン，ヘンリー・D・ソローやウオルト・ホイットマンそしてマーク・トウエーンやセオドァ・ドライサーなどをみれば，アメリカ文学史のなかの著名な作家たちが，個人差はあるものの，民主主義ににたいする倫理的・文学的な責任を意識していたことがわかる。ところで1950年代のアメリカ作家たちは，エリスンのいうようにそのような意識をもたなかっただろうか。当時のマッカーシズムという狂気の「魔女狩り」のもとで，作家たちも例外なく，順応と逃避，人間不信と裏切りという状況におかれてはいたがそのなかで，エリスンの指摘とちがって，ヘミングウエイ（『老人と海』1952），フォークナー（『墓場への侵入者』1948，『寓話』1950），A・ミラー（『るつぼ』1953），それに黒人作家ジョン・O・キレンズ（『ヤングブラッド』1954）などは，それぞれ独自のスタイルで，民主主義ににたいする倫理的・文学的な責任を意識した作品を公表していたのである。彼らの作品がひとしく，現実にたいする異議申立て，抗議をあらわしていたことは，あらためて指摘するまでもないことである。ところが，一部の黒人作家たちはそれとは逆な作品を書いていた。たとえば，ボールドウィンは，1949年に「万人の抗議小説」を発表して，次のような主張をした。「被支配者と支配者とが同じ社会のなかで，結びあわされているということを忘れてはならない。両者は同じ基準をうけいれ，同じ信仰をわかちあい，同じ現実にひとしく依存しているのである」[7]。つまり，ボールドウィンはここで，アメリカ社会にたいする被支配者の批判や異議申立てを忌避する必要を強調しているのである。ボールドウィンは，黒人と白人の「アメリカ的体験」の同一性という観点，つまり，数年後にエリスンもいっているように「アメリカ的体験は，そのもっとも深いところで一つのものである。その真実は，その多様性と変化の敏速性にある」[8] のであって，この観点から黒人民衆の「抗議」を拒否しなければならなかったわけだ。このボールドウィンの観点は，エリスンの全米図書賞受賞のスピーチで，文学的な課題と結びついたものとなる。エリスンはいっている。「アメリカを，その豊かな多

様性とそのほとんど魔法的な流動性と自由とに気ずいて眺めると，私は狭い自然主義――それはかずかずの偉業ののち，現代小説の多くを特徴ずけている決定的で救いようのない絶望にいたった――によって束縛されない小説を構想せざるをえなかった」[9]。つまり，「抗議小説」は，「人生を，人間を拒否し，人間の善，恐怖，力を否定し，人間を黒白に分類することだけが，実際的で絶対的な方法」[10]であるとしていたがゆえに，その「決定的な疑いようのない絶望」を克服するためには，「抗議小説」の方法は拒否されなければならなかったわけである。さらにライトは，1953年に『アウトサイダー』を発表したが，ここで彼は「自己実現」のためだけに殺人をつづける黒人を否定的に描けなかった。このように，当時の黒人文学のなかに，現実の狂気にたいする異議申立て，抗議をさける強い傾向があったのである。つまり，エリスンを含めた一部の黒人作家たちの否定的な傾向そのものが「合衆国憲法とその修正条項の神聖なプリンシプル」にたいして，「作家個人として倫理的責任をとろうとすることへの回帰の試み」を，つよく要請していたといってよいだろう。ボールドウィンについで「抗議小説」「狭い自然主義」を拒否したエリスンは，黒人作家として，『見えない人間』において，その「試み」に成功しているのだろうか。

(二)

エリスンには，彼の唯一の長編小説『見えない人間』までに，かなり重要な文学活動の時期があった。ここでは，エリスンがたどった文学的・思想的な主な軌跡を，『ニュー・マッシズ』(以下 NM)をつうじてみてみなければならない。なぜなら，NM でのエリスンの活動は，作家として文学的・思想的にめざましく成長した時期のそれでありながら，わが国では殆んど論じられたことがないし，アメリカにおいても，最近，R・G・オーミーリの不完全な研究がだされただけだからだ[11]。

エリスンは，1914年にオクラホマ市で生まれ，ラーフ・ウオルドと名づけられた。この名前は，アメリカ・ルネッサンスの詩人ラーフ・ウオルド・エマス

ンにちなんだものであった[12]。その後，ブッカー・T・ワシントンの創設したタスキーギー大学で音楽を専攻していたが，卒業一年前に，経済的理由で大学をはなれニューヨークに出る。最初は，トランペット奏者としての仕事を探していたがうまくゆかず，ハーレムの YMCA に住み込みで働いたり，精神分析医の受付助手をしたりするが，すべて長つづきしなかった。偶然知りあいになった黒人詩人ラングストン・ヒューズやアレイン・ロックのすすめで彫刻の勉強をはじめるが，これも間もなくやめてしまう。結局，当時新進の黒人作家として注目をあつめいてたリチャード・ライトの尽力によって，作品を書くようになった。まず，W・エドワード・タービンズの作品の書評を『ニュー・チャレンジ』誌（編集リチャード・ライト）1937年秋季号に発表した。これがエリスンの作家になる最初の「運命をきめた一歩」[13] であった。1938年になると，リチャード・ライトの特別の努力によって，連邦作家計画 (FWP) の仕事ができるようになり，毎月100ドルあまりの給料を連邦政府から支給されて，1942年6月まで，作家活動に専念することになる[14]。その後，『ニグロ・クオータリ』の編集者となっている。ただこの季刊雑誌は，1942年春から翌43年春まで4回だけ発行されたのち廃刊されている。その間，エリスンは，1938年～1943年8月まで，NM の寄稿者であった。1943年には，第二次世界大戦中のアメリカ商船隊に入ったため，執筆活動を中止している。彼が商船隊に加わったのは，1936年から全米海員組合に所属していたからといわれている[15]。

エリスンは，連邦作家計画にくわわっていた時期に，FWPの仕事として，ニューヨークの著名な黒人の活動や黒人をまきこんだ歴史的な事件について調査し，レポートをまとめている。たとえば，「ニューヨークの高等教育機関における黒人教員」「ジュピター・ハモン」「ニューヨークの大暴動——1863年徴兵反対暴動の4日間の詳細」などである[16]。エリスンは，FWP でこのような仕事をしながら，一方で NM にエッセイ，ルポルタージュ，書評や短編小説を発表していた[17]。

まず，書評をみてみよう。エリスンは，黒人作家だけでなく白人作家の作品もとりあげて書評している。38年から41年までのあいだに発表した12篇の書評

のなかから，「アメリカ的体験」を論じた一つをえらぶとするならば，第一にレン・ジンバーグという若い白人作家の処女作品『激しく生きて，声高に話せ』の書評をとりあげなければならないだろう（1940年12月17日号）。

この作品には，アンディという貧しい黒人少年が登場する。彼は靴磨きをしているが，ボクサーとしての素質をかわれトレーニングをはじめる。彼のひそかな望みは，試合から入る金を貯えて，父親と二人で人種的偏見のないフランスとか南米に行くことであった。そのうちに，ルースという若いコミュニストの黒人女性に恋をするようになり，彼の「逃避夢想」は，彼女を含めることによって，さらに大きくふくらむ。しかし彼の「夢想」は，現実につぎつぎにつぶされてゆく。原因は，人種差別と不公平な審判の判定であり，さらにニューヨークのボクシング界を支配しているギャング組織の暗躍であった。これらが，この作品で「アクションとサスペンスをふんだんにつかって」提示されている。この作品は「黒人の生活への接近が，恩きせがましい態度，ステレオタイプな思想，その他人種的偏見から派生する諸々の欠陥によって毒されていない作家が，黒人の個性の経済的基礎についてマルクス主義的に理解しておれば，十分成功できることをしめしている。それにマルクス主義的人間観をプラスすれば，黒人の性格を描ききることはきわめてむつかしいと考えられている仕事において，白人作家が立派に力量を発揮できることをしめしている」。エリスンはこのように書き，さらにこの作品の成功のもう一つの要素は，「ハード・ボイルド派の手法」を自分のものにしていることであるとのべている。「この（ハード・ボイルド派の）手法は，その否定的な哲学的基礎にかかわらず，アメリカ的体験の暴力的特質――ヘミングウェイの作品の登場人物の生活と黒人の生活とに共通する特質――を描出するのに成功している」と評している。

この書評で，エリスンが強調している第一の点は，白人作家が黒人を描くばあいには，人種的偏見と無縁であることと，「個性の経済的基礎についてのマルクス主義的理解」と「マルクス主義的人間観」が必要不可欠であること，第二に，独創的な手法――内容にふさわしい形式――を駆使すること。これらによって「アメリカ的体験の暴力的特質」を文学的に描出することが可能になっ

ている，とのべているのである。エリスンがここで，マルクス主義の必要とどうじに，「アメリカ的体験の暴力的特質」の描出に一定の文学的意義を見出していることに注目する必要があるだろう。というのは，つぎにとりあげる書評のなかで，それと黒人体験とが深くかかわっているからである。

エリスンは，1941年12月2日の NM で，黒人作家ウィリアム・アタウェイの『製鉄炉上の血』(1941年) を書評した。これで，まず作者アタウェイが，第一次世界大戦当時，多数の黒人農民の北部工業地帯への「大移動」の黒人体験をみごとに掘りおこしている，と指摘している。1919年の春，3人の黒人兄弟，メロディ，ビッグ・マットとチャイナタウンが，ケンタッキー州の農場でのリンチから逃れて，ペンシルベニアの製鉄工場の労働者になる。自由と給料とは，彼らにとって驚異ではあったが，しだいに悲惨な黒人体験を強いられるようになる。信心深かったビッグ・マットは，キリスト教を捨て，保安係になってスト中の労働者を襲い，逆に殺される。「酒と女と労働」の生活にあけくれていたチャイナタウンは，失明し童心にもどる。自分と他者との関係を，つねにギターで表現していたメロディは，最後にギターを捨て，失明したチャイナタウンをつれて，ピッツバーグに向かう。

エリスンは，作者アタウェイがこの作品で「半農奴的農園と工業都市的環境」という黒人体験の二つの領域と時代をとらえ，二つの「経済的生産様式の衝突からのダイナミックな動き」を提示していることに注目している。また，登場人物が，製鉄炉のように唸りを発するたたかいのなかでとらえられていることを評価している。しかし，作品の思想上の問題として，エリスンは，まずたたかいが人物の意識のなかでどのように受けとめられていたかという点をとりあげている。ビッグ・マットは殺され，チャイナタウンは盲目になり，メロディはたたかいの勢力にたいする理解をまったく深めないまゝである。したがって，この作品は「黒人民衆の価値観の死滅にたいする哀歌という印象」を与えかねない。また，これには前近代的な労働者の宿命論のようなものが，黒人の退廃や苦しみの説明として，ときおり表面にでてきたりもする。作者は，民衆の価値観あるいは民衆の破滅の意味を理解してはいるが，そのより高いレベルでの

再生をみおとしている。「個々の民衆は，鉄のるつぼのなかで溶解されているが，どうじに新しい要素と融合していることをみていない……その結果，作者は素材のなかの絶望に打ちのめされて，人物の希望への足場をまったくみていないのである」ときびしく批判している。

つぎにエリスンは，この作品の手法，構成の問題として，「作品の挿話的特質」などをあげ，そこでは事件や状況の意味が，人物の思想や情緒によってあらわされるのではなくて，作者自身の言葉で表現されている，と指摘している。「この作品の迫力は，アタウェイの表現にあるのでなくて，むしろ作品の基礎になっている状況のもつおどろくべき生命力と魅力」にある，とのべている。

全体として，作者アタウェイがしめしているように，民衆の価値観は工業化のインパクトに耐えられなかったし，黒人民衆と労働組合運動との間には，当時大きなへだたりがあった。「しかし，そのへだたりは絶対的なものではなかった。当時においても，ある黒人たちは，労働組合主義で彼らの苦しみの多くが解決できると考えていたのである」。エリスンはこのように批判して，最後に，「これらの問題を提起することにおいて，アタウェイ氏は，アメリカ的体験のいくつかの中心的な問題にふれている」とのべている。

以上，二つの作品の書評から，エリスンが「アメリカ的体験の暴力的特質」と黒人体験の悲惨さや「黒人民衆の価値観の死滅」とを論理的に関連ずけているのを知ることができた。どうじに，民衆の価値観の「より高いレベルでの再生」や「新しい要素との融合」を，マルクス主義，「労働組合主義」擁護の観点から，文学作品にもとめているのも見おとしてはなるまい。

エリスンの書評のきわだった特徴を一つだけあげるとするならば，職業的な作家，批評家のそれとちがって，作者の現実認識の方法にまで眼をゆきとどかせていることである。ちなみに，アタウェイのこの作品についてのエリスンの批評と，他のすぐれた書評とを比較してみよう。ここに『ニューヨーク・タイムズ』に掲載されたドレイク・ド・ケイの書評がある(18)。

ド・ケイは，まず第一次世界大戦中から戦後にかけての南部黒人の北部への大移動の特徴をあげている。南部で，農奴のような生活を強いられている黒人

小作人にとって，北部の工場での一日4ドルという低賃金でさえ魅力であり，さらに社会的自由を享受できることへの期待もくわわって，彼らは南部の土地を捨てたのだった。この「集団移動」は，南部で農業労働力の涸渇という問題をひきおこしただけでなく。北部の「雇用主と労働組合指導者」にとっても深刻な状況をつくりだした。当時，製鉄産業の労働組合は「クローズド・ショップ制」を採用していたが，雇用主はしだいに黒人を「スト破り」として使うようになる。白人労働者は，低賃金と劣悪な労働条件を甘受する黒人によって，自分の職がうばわれるかもしれないという恐怖をもつようになっていた。

この作品では，中心人物として三人の黒人兄弟が選ばれてはいるが，悲惨な状況の犠牲者として黒人だけが描かれているのではなく，白人やスラブ系移民たちも，低賃金と劣悪な労働条件のもとで苦しんでいたことが描かれている。そして「著しく客観的に書かれ，現代文学ではみられないほど鋭い社会批判をふくんだリアリズム作品」となっている。ド・ケイはこのようにこの作品を全体として高く評価し，さらにこれの「文学的に卓越している主要な点の一つは，作者が粗野な男や女たちを感傷的に描きだすことを拒否しているところにある」と，リアリスト・アタウェイを賛えている。

ド・ケイのこの書評は，作品の社会的背景をてき確にとらえているだけでなく，登場人物の葛藤をその背景と関連させて，ていねいに紹介している点とか，「現代文学」における作者の位置等を指摘していることなど，職業的批評家のすぐれた書評として評価できる。これらの点では，新進のエリスンのそれを凌駕しているといえるだろう。しかし，エリスンのものは，先にのべたように，作者の現実認識の方法にまで切りこんでいるという点で評価しなければならない。とくに，アタウェイの作品が，のちになっても「30年代のマルクス主義的宣伝の特徴をもっている」[19] とか，「思想的には，この作品は人種意識から，『赤い10年間』（レッド・ディケィド）に多くの黒人知識人が体験した階級意識への移行をあらわしている」[20] というような見当ちがいな解釈がなされていることを考えると，作者の現実認識の方法，階級意識を「労働組合主義」の観点から，きびしく点検しているエリスンの批評は注目に値するといえるだろう。

つぎに，この頃のエリスンが，R・ライトや L・ヒューズの作品をどのように受けとっていたのかみてみよう。リチャード・ライトが，1940年に『アメリカの息子』を発表すると，1カ月もたたないうちに25万部も売れた[21]といわれるほどの反響があった。たとえば，『ニューヨーク・タイムズ』の1940年3月3日号では「これ（『アメリカの息子』）だけで黒人問題がわれわれの関心をうばうことになるだろう。たしかに，『アメリカの息子』は，リチャード・ライトの重要性を，もっともすぐれた黒人作家としてだけでなく，今日作品を書いているどの作家よりもめざましいアメリカ作家として，明示しているのである」[22]と書いていた。ライトが，1938年に『アンクル・トムの子供たち』を出版して全国的に注目をあつめていたところに，この衝撃的な第2作を発表したことは，すくなくとも同じ黒人作家，とくに連邦作家計画に約200名いたといわれている黒人作家たち[23]に，強い刺激を与えた。連邦作家計画を全面的に支持していた『ニューマッシズ』では，1940年3月5日に書評し，その後5月までに2回ニュースや討論を掲載している。エリスンは，1941年8月5日の「最近の黒人小説」と題する評論のなかで，『アメリカの息子』をとりあげている。

エリスンは，この評論で，黒人小説は着実に「アメリカの現実の把握」にむかって動いており，量的には小さなものであるが，質的には「20年代のハーレム作家の最低の努力を反映した作品から『アメリカの息子』の高い芸術的力量」をそなえるにいたっているとのべ，この作品が「アメリカ黒人による最初の哲学的作品」であると高く評価している。

エリスンは，1920年代からの黒人小説の展開にとくに言及して，その特徴として，思想の不健全性[24]，「黒人中産階級の理想の表現によるテーマの消極性」，「手法上の後進性」「黒人の民間伝承の無視」等を指摘している。さらにエリスンによれば，黒人中産階級の理想は，大恐慌による失業，貧困，市民的自由の抑圧という現実におしつぶされてしまった。この時，黒人文学の新しい道を切りひらいたのがラングストン・ヒューズであった。そこでは「新しい手法が使われ，新しいテーマがあらわれ」，黒人作家たちは次第に黒人労働者や農民たちを動かしている時代の力をとらえ，記録しようとするようになる。黒人民

衆が「民衆意識を労働者階級意識にかえようとしている」状況を，芸術的にとらえ，表現するのにふさわしい手法とテーマをみいだそうとする努力がおこなわれたのである。その核になったのが，ジョン・リード・クラブやアメリカ作家連盟であった。これらの活動が，1939年から1940年にかけての黒人文学の主要な作品の出現に大いに寄与したとのべ，具体的にゾラ・ニール・ハーストンやアーナ・ボンタムやウィリアム・アタウェイやウォーターズ・E・ターピンの作品をとりあげたあと，ふたたびリチャード・ライトのジョン・リード・クラブでの活動と『アメリカの息子』とを紹介している。『アメリカの息子』において，「アメリカ黒人の生活の想像的描写が，アメリカ文学の広大な流れと合流したことをしめしている」と述べ，黒人文学が1920年代の最低の状況を克服して，ライトによってドライサー，ヘミングウェイ，スタインベック，それにフォークナーやコールドウエルたちのアメリカ文学の流れに合流することができたことの重要性を指摘する。これは，しかしながら1950年代にボールドウィンやエリスン自身が肯定しているような「同化主義」（アシミレーショニズム）の方向ではなくて，黒人作家の作家としての「成長や，社会的責任の明確化や増大」の自覚の必要を強調したものであった。その先駆的な黒人作家として，エリスンはリチャード・ライトとラングストン・ヒューズをあげているのである。

つぎに，ヒューズの作家活動についてのエリスンによる評価をみてみよう。1940年9月24日の NM にエリスンは長文の書評を発表した[25]。ここでは，ヒューズの自伝『大海原』が論じられており，まずこの自伝が，1902年ヒューズの誕生から1930年までを扱っていること，つぎにヒューズの家系にふれ，祖母の最初の夫はジョン・ブラウンの武装蜂起（1859）に参加して死んだこと，また大伯父は再建期に議員としてバージニア州から選出され，後にハワード大学法学部の初代学部長にえらばれていること，一方黒人の父親は妻と子供を捨てゝメキシコに渡り，金持ちになっていたこと等が紹介されている。

この書評でとくに注目されるのは，第一次世界大戦後のヒューズを含めた黒人作家・詩人たちの活動の評価である。1920年代には，ニグロ・ルネッサンス

といわれる黒人の文学芸術活動の高揚の時期があった。これと時期を同じくして，黒人解放運動も新しい段階に入っていた。「黒人は以前にまして戦闘的になり，アメリカ民主主義の欠陥を攻撃しはじめた。この新しい戦闘精神は，アメリカの黒人集団が抑圧された民族であるという意味で，民族主義的であった。しかし民族的性格をもっているにかかわらず，その集団は階級的に区分されないわけではなかった。この新しい戦闘精神に芸術的表現を与えたのは，たまたま黒人中産階級出身の者か，すくなくともそのイデオロギーに支配されている者であった」。そこには，クロード・マッケイとジェームズ・ウェルドン・ジョンスンがいた。彼らは，それぞれの自伝で当時の運動をあつかっているが，それらはヒューズが描いているほどリアリスチックではない。ヒューズは，その「洞察力のたしかさ」によってニグロ・ルネッサンスを生き残り，黒人大衆のなかにみずからの文学的ルーツを探して，ブルースやスピリチュアルや民話のもつ民衆体験を詩にとり入れている。だから，1929年の大恐慌で，他の作家たちの「芸術的建物」は崩壊してしまうが，ヒューズのそれは「民衆的基礎」のうえでビクともしなかったのである。

ヒューズにたいするこのような高い評価の一方で，エリスンは『大海原』のいくつかの弱点もはっきり指摘している。その一つは，この作品ではヒューズの「体験の美学的側面に注意がむけられすぎて，その体験のもつより深い意味がおきざりにされ」ていることである。つぎに，ヒューズは作品のなかで，分析と論評とそして感情の表出とを避けているので，「より深い統一が失われている。その統一というのは，その人間が体験を熟考し，意識的思考に昇華させることによって形成されるものである。黒人の文学作品にはこの統一が必要である。それをつうじて，作家は読者の体験を明確にし，読者に自己を再創造させるのである。たぶん，この統一の欠如ゆえに，『大海原』で，作品の終りが終りになっているのである」。

以上のような鋭い指摘のあと，エリスンはこの「作品の終り」がヒューズの終りではないことを証明するために，30年代のヒューズの活動を補足的に紹介している。それによれば，ヒューズは作家として果たさなければならない革命

的な役割をうけ入れ，パリで開かれた文化擁護国際会議（1937年7月）で演説し，スペイン市民戦争の時期に共和政府を援助するためにマドリッドにおもむいたのだった。

ここで，エリスンの『大海原』評と，この作品をあつかった新聞，雑誌の書評とをくらべてみよう。たとえば，比較的長い書評は『ニューヨーク・タイムズ』[26]のものであるが，1650語のほとんどがヒューズの詩人・作家への過程の「生活の再現」が紹介されているだけである。また『サタディ・レビュ』[27]では，オズワルド・ガリスン・ビラードが書評している。彼は，かってフレデリック・ダグラスとともに奴隷制廃止運動をおこなったウィリアム・ロイド・ガリスンの孫である。彼は，まずヒューズの「知的な真面目さと率直さに感動」し，「プロパガンディストでも辛辣すぎる批評家でもない」ことを強調している。そして，この作品の意義について，「アメリカにおける黒人の生存と公平と解放と知的自由をもとめるたたかいにとって，もっとも価値ある貢献をしている。しかし，ヒューズ氏に注意しておきたいことは，わが軍部独裁者が政権をとれば『大海原』は最初に焚書されるだろう」と書き，高く評価している。だが「軍部独裁者」がなぜ「プロパガンディストでない」ヒューズのこの作品を最初に焚書にするのか，その理由がまったく明らかにされていない程度の文章である。つぎに，『ニュー・リパブリック』[28]に発表されたリチャード・ライトによる書評をみてみよう。ライトは，まずリアリスチックな文学の隆盛にはたしたヒューズの役割についてのべている。その第一として，ヒューズが，アメリカ文学をピューリタニズムの制約から解放したセオドァ・ドライサーと同じような先駆者的役割をはたしたことをあげている。黒人文学はこれまで「臆病で，ばくぜんと抒情的でそして民俗的であった」が，その制約から解放したのがヒューズであった。第二に，ヒューズは黒人の問題を，詩，短編小説，戯曲をつうじて世界に提示し，またフランスやロシアやスペインのものを翻訳して外国の人民の体験を「黒人作家の軌道内にとり入れ」るという「文化大使」の役割をはたしてきた，として高く評価している。その他に，ヒューズの作家としての強じんな資質を強調している。

ライトの書評で，特にエリスンのものとくらべてみて相違している点としては，第一に，ライトのものは仲間ぼめ的な性格をたぶんにもっていることがあげられるだろう。第二には，ライトは過去の黒人文学の制約の一つとして「民俗的」（フォーキッシュ）であったことをあげているが，エリスンは逆にヒューズの作品の「民衆的基礎」や「ブルース，スピリチュアルや民話のもつ民衆体験」の導入等を高く評価している点である。これについては，エリスンの分析・評価が正しいことが，今日では証明されている[29]。第三としては，ニグロ・ルネッサンスの評価についてである。ライトは，ここで「アメリカの繁栄の《黄金時代》と期を同じくした黒人芸術家の実りの多い作品活動の驚くべき時代」というふうに記述している。一方，エリスンはそれを階級的観点にたってとらえ，黒人芸術家の活動が中産階級のイデオロギーに深くねざしていたために，1929年の大恐慌にあうと，ヒューズ等の例外をのぞいてほとんど生き残れなかった，と分析している。この点についても，エリスンのそれは，表面的な現象だけでなく時代の本質を見すえており，ライトやその他の批評家による書評とくらべても，群を抜いてすぐれたものになっているのである。

（三）

エリスンが書評でみせた鋭い現実感覚や階級的観点にたった分析力は，短篇小説でも生かされている。 NM に1941年に発表した「ミスター・ツーサン」をとりあげてみよう[30]。

この作品は，二人の黒人少年の会話からはじまる。「あれが全部腐ってしまって，虫がくったらいいな」「大嵐がきて，木を全部たおしてしまってくれるといいや」。二人は通りの向こうにある白人の家で，櫻んぼが枝いっぱいに実をつけ，朝日の光をうけて濃い赤色に輝いているのをみている。白人のローガン老人が，子供たちの動きを探るように，椅子で身体をゆすりながらみている。小鳥たちが，櫻んぼの木に自由に入りこんでいるのを，ライリーとバスターの二人の黒人少年は羨ましそうにみている。家から，ライリーの母親が白人の服

を縫うミシンの音がきこえてくる。彼女はミシンをつかいながら歌をうたっている。「神の子はすべて翼をもっている」というスピリチュアル。二人の少年はじっときいっている。ローガン老人も動きをとめてきいている。ライリーは「お前，翼があったらどうするんだ」ときく。北部のどこかに行くというが，結局二人とも「黒人が自由であるところ」とか「アフリカにおりて，ダイアモンドを手に入れる」ということになる。しかしアフリカには「長い槍をもった食人種」がいるし，「奴等は世界中で一番の怠け者なんだ」とバスターがいう。ライリーはそれをはげしく否定する。バスターは「地理の教科書にそうかいてある」という。「お父ちゃんは，アフリカには王さまがいて，ダイヤモンドや金や象牙があるし……忙しくて怠けてなんかいられないといっていたんだ」とライリー。それをきいてバスターは，実は先生が話してくれたんだが，といって「アフリカ人でツーサンという名前の人が，ナポレオンをやっつけたんだって」。それにたいしてライリーは「どうしてそんな嘘をつくんだ」とくってかかる。バスターは，先生の話をライリーにきかせる。「ツーサンと彼の部下がアフリカの山で，登ってこようとする白人の兵隊を射ちたおしたんだ」。彼らは「ダマスカスの剣」をつかったし，「黒い大砲」をつかって敵船に「黒い砲弾」をうちこんだ。「ツーサン。ターザンによくにている……」「ターザンじゃねぇ。ツーサンだ」。「ツーサンは大声でいったんだ『お前ら白人どもはおとなしくする方が身のためだ。わしはやさしいツーサン父ちゃんだが，わしの黒んぼどもは白人の肉を欲しがっているんだから』」。ライリーとバスターは，圧倒的なツーサンとおびえる白人兵との対決を実演してみる。バスターは，この話をしてくれた女教師がすばらしいというが，これがなぜ本にならないのかと疑問をだす。「ツーサンは白人にきつくあたりすぎたからではないのか」とライリー。「あの人は最高だ」とバスター。その時，ライリーの母親が，白人に迷惑をかけないように裏庭で遊ぶように命ずる。バスターは，通りで遊んでいて「こっそりはいりこめば櫻んぼとれるかもな」という。ライリーは答えずに「鉄は鉄，ブリキはブリキ，こんなふうに話は終わる」とうたいながらステップをかろやかにふんでいる。

ここに登場するツーサンは，ツーサン・ルベルチュール（174?～1803）で，ハイチの奴隷であったが，イギリス軍やフランスのナポレオンの大軍を壊滅させて，ハイチに共和制を確立した黒人の歴史的英雄である。彼の壮挙は，その後のアメリカの奴隷解放のたたかいに大きな影響をあたえたといわれているが，そのツーサンの知らされていなかった革命的なたたかいを知らされたことが，この物語の展開の発端となっている。ここで，二人の黒人少年は，熟した櫻んぼを目の前にして，それが白人のものであるがゆえに食べられないくやしさを味わわされていた。その時，ツーサンの話がで，彼がナポレオンたち白人の軍隊を子供をあしらうかのようにけちらしたことに痛快さをおぼえる。それが二人のなかで黒人であることの自信のようなものに次第にかわっていく。そして最後に，うまくやれば白人の家の櫻んぼをとりにゆけるぞ，と思うようになるのである。

エリスンは，黒人民衆が黒人の「革命的過去」についての関心を強くもちはじめていた，と書いていた(31)。その関心は，黒人民衆の心のなかにそれまであった卑屈さ，劣等感のかわりに，黒人であることの自信と責任を自覚させるようになる。だが，そのような役割をはたす黒人の「革命的過去」を掘りおこし，作品化するという文学的課題は，当時では1960年代以後ほどには強調されていなかった(32)。当時では，作品のなかの労働者階級の意識がもっとも重要視されており，同様に黒人の民衆意識，「民衆的基礎」に重点がおかれていた。だがエリスンは，この短篇小説で，黒人詩人で作家でもあるアーナ・ボンタム（1902–73）とおなじように(33) 黒人の「革命的過去」を掘りおこすという先駆的な努力をおこなったわけである。それは要するに，エリスンが，黒人解放をもとめる現実のたたかい，たとえば後でのべる全米黒人会議とのかかわりをもち，そのなかで黒人の「革命的過去」が必要不可欠であることを体験的に自覚していたからであろう。なお，この短篇については，NM の読者が，1941年に全米で発表された短篇小説のなかでもっともすぐれたものであると激賞しているほどの評価をえた作品であることをつけくわえておかなくてはなるまい(34)。

(四)

エリスンが，当時，現実の人種差別，階級矛盾の問題に積極的に対応していたことは，NM に発表した彼のさまざまな文章からうかがえる。たとえば，彼はニューヨークでリンチをうけた黒人青年たちをルポルタージュにまとめている[35]。

この事件は，南部の小さな黒人大学の学生3名が，ニューヨークに学費かせぎにやってきたことが発端になっている。彼らはそれまで北部からやってきて大金を大学に寄贈する篤志家以外ほとんど白人をみたことがなかった。しかし，ニューヨークでは，黒人のまわりに白人は多数いた。仕事はなかなかみつからなかった。だが大都会の自由な雰囲気に圧倒されて，気持は沈んではいなかった。7月25日夜，夕暮のハドソン河の光景をみようとして黒人街を越える。ただちに白人警官がきて，アムステルダム街を越えて白人街の方に入ってはならないと警告する。3名はハーレムの方向に戻りはじめ，岡の上までくると数名の白人青年にあい，彼らにリンチされる。救急車がきて，3名を病院に運ぶ。しかし，不思議なことに，3名がリンチされているときには，警察の車は近くにいなかったのである。黒人は北部でも，深南部とおなじように，暴力的にあつかわれ，ハーレムの狭いところに閉じこめられていながら，白人の家主によって法外な家賃を請求されているし，仕事は白人優先だという現実を，3名の黒人学生はあらためて思いしらされたのだった。この事件については，民主的な方法で反撃が開始され，抗議集会がもたれ，市長にも正式に訴えた。そしてこれを機会に，黒人にたいする暴力をそそのかしているグループをのぞいて，ユダヤ人やキリスト教徒の市民グループが，この指導者と協力してこの種の事件の撲滅に努力することになったのである。

このルポルタージュに登場する3名の黒人学生は，ニューヨークに出てくる動機とか，ニューヨークでの職探しの日々の空しさなど，作者エリスン自身（そして『見えない人間』の主人公）の体験と類似する部分をおおくもっている。ということは，それらが当時南部の黒人青年たちの北部体験とでもいうべき—

定の普遍性をもっていたと考えられる。ごく大ざっぱないいかたをすると，黒人人口は，北部諸州で1910年と1940年とを比較すると，倍以上に増加している。これは，いわゆるアーバナイゼーション（都市化）の結果であるが，これからでも南部から北部にきた黒人青年たちが，ここ登場する3名の大学生と同じか，あるいは類似した体験をかなりおおくもっていただろうことが推測される。エリスンはそこに着目して，それらが黒人の「民衆体験」として無視できないという観点から，フィクションをまじえずにルポルタージュとしてまとめたのであろう。

エリスンが，黒人の「民衆体験」を明確に表現しているのは，このルポルタージュと，第3回全米黒人会議の報告と，エリスンの第一の評論集『影と行為』（1953）に収録されているハーレム探訪記ぐらいである。それらのなかでエリスンの政治的・思想的立場をもっとも鮮明にあらわしているのが，全米黒人会議の報告である。

全米黒人会議（以下 NNC）は，ニューディールの時期に労働組合運動の高揚に刺激されて，1936年2月シカゴで発足した。この行動綱領では，当時の最重要課題がとりあげられ，黒人にたいするジム・クロウイズム（人種差別），リンチに反対し，投票権や就労権を保証させることをめざした[36]。そしてここには，百万人以上の黒人が結集し，そのなかにはラルフ・バンチやW・E・B・デュボイスやA・フィリップ・ランドルフ（議長），ジョン・P・ディビス（書記長）等がいた。NNC の組織・綱領の作成にはアメリカ共産党が強い影響力を発揮し，この会議を支持していたカトリック教徒を統一戦線に結集し，運動を発展させたといわれている[37]。さらに NNC の第2回大会（1937年5月）では，大統領夫人のエリノア・ルーズベルトも参加して，運動の発展のために寄与することを宣言している[38]。これらは，NNC が，当時少数のラジカルだけの運動ではなく，全国的な影響力のある広範な統一戦線の組織であったことを物語っているのである。

1940年4月，NNC の第3回大会がワシントンで開かれた。29州から約1300名の代議員があつまり[39]，エリスンもこの大会に出席した。

ジョン・L・ルイス（CIO の指導者）がもとめていた新しい政治運動組織——ルーズベルトが見捨てたニューディール施策を継承させる目的をもった第三政党——の結成にたいして NNC としてどのような対応をするのか，またすでに NNC の指導者の一人は裏切ったという噂があるがそれにたいする代議員の反応はどうか，あるいはこの大会に「統一と自由」への黒人の断固とした意志を感じ取ることができるかどうか等，これらをエリスンが NM をつうじてつたえようとしていたのであった。

労働省の新しい建物に入っていくと多数の黒人代議員がつめかけており，そこで信任状や代議員証やバッヂをうけとっている。宿舎は，急拠設営されたテント村があてられた。一般のホテルでは，黒人差別がおこなわれていたからである。しかし代議員たちは，彼らにたいする首都ワシントンの冷たい空気を気にもとめないで，熱っぽく語りあっていた。ある者は，礼拝用の一帳羅を着てしゃちほこばっている。白人の代議員も多数いたが，白人も黒人も「リンチをやめろ」のバッヂをつけていた。大会場は熱気につつまれ，ジョン・L・ルイスが娘のキャスリンを連れてあらわれると大拍手がわきおこる。ルイスが演説し終えて降段しはじめると，ジョン・P・ディビスがよびとめ，ルイスを黒人人民への顕著な貢献者として表彰することを宣言した。ルイスは，それにこたえて「黒人人民にたいする機会均等」の信念を今後もつらぬいていくことを誓う。大きな拍手が，ふたたびわきおこり，この表彰の歴史的重要性を代議員だれもが理解していることがわかった。その後で，A・フィリップ・ランドルフが演壇にあがった。聴衆である代議員は，ランドルフの最近のいくつかの奇異な言動が，NNC 議長のそれとして受け入れがたいものだということを知っている。ランドルフの演説は抽象的で，複雑である。それにはまちがいなく「レッド・ベイテイング」(赤攻撃) のひびきがあった。エリスンは書いている。「私は坐ったまゝ裏切られた気持ちで演説がおわるをまっていた」。「私は一人の指導者がみずからの指導性を抹殺する行為の目撃者となったのだった」。

翌日，ジョン・P・ディビスの書記長提案がおこなわれた。ディビスは，まず戦争と平和についてふれ，「われわれはインドや中国やアフリカ人民のため

に平和と自由を欲する……」とのべ，さらに「アメリカ黒人人民は，アメリカ帝国主義にしたがってソ連邦攻撃にくわわることを拒否するであろうし，反ソビエト冒険の犠牲にされることを拒否するであろう」と宣言した。これは代議員たちの「一つの共通の意志」になり，大会の熱気はさらにたかまった，とエリスンは書いている。その後，大会は分科会にわかれて討議をつづけたが，とくにデンマーク・ビージーやゲイブリェル・プロサ（両者とも歴史的な奴隷反乱の指導者），ハリエット・タブマンやフレデリック・ダグラス（両者とも奴隷解放運動の著名な指導者）の名前が発言のなかでおおくきかれたことをあげ，黒人英雄の時代が現代のアメリカに戻ってきた，と書いている。

最後に，NNC が CIO に加入する決議が採たくされ，これにたいしてランドルフが抗議する。しかし，代議員の多くの声は，ランドルフの抗議とは反対に，「アメリカの未来の最良の保証」になっていたのである。

エリスンのこの報告は，NNC 第3回大会の方針と熱気を，傍観者的な作家の眼をとおしてつたえたものではない。現実に積極的にコミットしている作家として，大会の先進的役割を，期待と共感をこめて描きだそうとしたものである。別の見方をすれば，アメリカ共産党がイニシアチブを掌握していたこの大会の状況を，こんなふうに報告することによって，エリスンは彼自身のアメリカ共産党にたいする思想的・政治的立場を鮮明に表明したのである，といえるだろう。この彼の立場は，1943年8月頃に，NM の主要寄稿者リストから彼の名前がなくなるまで続いている。

（五）

エリスンの唯一の長編小説『見えない人間』にうつろう。この作品は，「見えない人間」の「私」の現在の物理的・精神的状況を語っているプロローグとエピローグを除くと，1章から10章までが前半部で，11章はそれ以後の後半部の導入部分と考えることができよう。まず，プロローグでは，見えない「私」が，黒人街ハーレムの近くの建物の地下室にいて，ルイ・アームストロングの

音楽をききながら，一人で無責任な生き方をしていることがあきらかにされる。そして第1章から，自分の20年前の出来ごとを語りはじめる。「私」は，南部の高校を優秀な成績で卒業し，黒人大学の給費生の資格が与えられる。その夜，夢のなかに死んだ祖父があらわれ，その資格証明書を読むよう命じる。それには「この黒人少年を走りつづけさせよ」と書いてあった。「私」は夢からさめる。その後，黒人大学で学ぶようになるが，三年次に，北部の白人で，大学の創設者を，旧奴隷地区で奴隷小屋に住んでいる男のところに案内する。この男は，同居している妻と自分の娘とを同時に妊娠させて，評判になっていた。この男の体験談をきき，気分を悪くした白人創設者を，さらに精神異常者や売春婦たちのたむろする賭博場に案内することになった。ここで，もと軍医の黒人に「私」は，「生きた死体」だとか，白人創設者のこと以外は「感覚で感じとることはするが，脳にまではつたわらない。受け入れはするが，消化をしようとはしない……あなた（白人の大学創設者）の夢が完璧に実をむすんだ人間だ。機械人間だ」（3章）と嘲けられる。大学に帰ると，白人創設者の命令に従順にしたがった「私」の行為に黒人の学長が激怒し，「お前は，黒人で南部に住んでいるのだぞーうそのつき方も忘れたというのか」（6章）と，私はののしられる。そして不祥事の責任をとって，夏の間大学をはなれ，ニューヨークにでて，学資をかせいでくるよう命じられた。「私」は，学長から手渡された数通の紹介状をもってニューヨークにでるが，ふとしたことでその紹介状の内容を知ることになった。それには「この男に，希望あふれる旅人の向こうに，つねに輝きながらかなたに後退していく，地平線のような，約束を与え続けて下さい」（9章）と書かれてあった。「私」は黒人学長によって「走りつづけさせられ」ていたのであった。しかしその後「私」は，運よくリバティ・ペイントではたらきはじめる。その直後に，黒人のボスとの争いがもとで，工場で大爆発がおき，「私」は重傷をおう（10章）。

ここで描かれているニューヨークは，「私」にとって，北部というよりも，いわゆる Down South にたいする Up South にすぎない[40]。工場の中の状況も，「私」にとって，南部的な制約をもったものである。そして，「私」も，ニュー

ヨークにきてはいるが，Down South にいた「私」と少しも変わってはいず，「生きた死体」「機械人間」のまゝであった。そんな「私」は，工場の附属病院から退院して「生まれかわった」（12章）ようになり，白人にたいして南部にいたときほど恐怖心をもたなくなる。とりわけ，考えられないほど雄弁な「私」に生まれかわったのである。そして兄弟愛団に入り，共通の目的をもった運動のなかで，はじめて友情や同志愛を体験する。「私」の体験の意義を問題にするならば，これは10章以前のそれとは，まったく異質であるといえるだろう。

南部的状況下では，優秀な学生であったが，実は「私」は「生きた死体」「機械人間」にあまんじていた。一方，「私」の祖父や，黒人大学の学長ブレッドソー博士は，表面的にはアンクル・トム的ではあったが，「頭をはたらかせて」白人の足元を，機会があれば掘りくずす「裏切者」になるのに躊躇しない人間である。彼らは，白人の黒人にたいする盲目性を最大限に利用していたのであった。ところが「私」は，兄弟愛団に入るとまもなく中心的な活動家にされるが，「考えるために雇われてはいない」といって，命令に服従することだけを要求される。この点で，兄弟愛団はアメリカ黒人にとって，愚かで非人間的な革命的政治集団であることが暗示されている。「私」は，結局，兄弟愛団に裏切られ，かって南部の大学から追放されたときよりもっと深刻に，「走りつづけさせさられる」のである(41)。そして，南部にも北部にも，もはや逃げる場所をなくした「私」は，地下に落ち，見えない人間になってしまわざるをえなかった。

兄弟愛団（実はアメリカ共産党を指す）の裏切りは，「私」にとって，民衆がたくした善意を裏切るということであった。この政治集団は，過去の黒人英雄フレデリック・ダグラスを尊敬する誠実な黒人同志を見捨ててしまう。幹部は官僚的で，しかも性的に腐敗し，民衆を「われわれ（兄弟愛団）の綱領をつくるための素材の一つにすぎない」(42) と公言するほど退廃していた。さらに彼らは，相もかわらぬ公式的原則主義者で，民衆を組織する能力と魅力が，「私」とくらべても，低かった。「私」はこの集団のなかで「消耗品とみなされる」(43) だけだった。これらすべての点で，「私」の体験は，以前の南部的なそれとま

ったく異なったものであったのである。

しかし，このような兄弟愛団の体験の異質さについて，マッカーシズムの時期に極端な「反スターリン主義者」，反共主義者になった批評家アービング・ハウは，これは「理解できない……スターリン主義者は危険でもなんでもなくて，ただの道化にすぎないとおもわせる」[44] ものだと批判している。つまり，その体験の異質さが，「道化」の次元にまで誇張されて，真実ではなくなっているというわけである。そこで問題になるのは，作者エリスンが兄弟愛団を，ハウのいうように，「道化」の集団のように戯画化してまで，なぜこの作品に登場させねばならなかったのか，ということである。もちろん，そうすることによって，南部体験との異質さを強調するというような単純な理由ではあるまい。これを究明するためには，まずこの作品の時代背景になっている1930年代に，兄弟愛団の「道化」や非人間性が，黒人民衆の一般的で，しかも，焦眉の問題であったのかどうかを，たしかめてみる必要があるだろう。

すでにみてきたように，そしてエリスンが NM に書いていたように，1930年代ではそのような問題よりも，北部における南部黒人の Up South の体験や，NNC の第3回大会で提起された問題などが，より普遍的な文学的課題として論議され，実践されていたのである。エリスン自身が，当時の NM に，このような文学的課題に誠実にこたえたすぐれた短篇を発表していた。しかし，エリスンは『見えない人間』を書くときには，それらをあえて無視した。何故か。

これを考えるためには，この作品が書かれた1940年代後半から50年代にかけてのアメリカ社会の状況をみてみる必要がある。40年代後半から50年にかけての国際的な最大の事件は，1949年の中華人民共和国の成立，ソ連の原爆保有，そして1950年に朝鮮戦争が勃発したことであろう。アメリカ国内では，国際的なこれらの事件を反映して，危機意識がたかまり，マッカーシー旋風という現代の「魔女狩り」「赤狩り」が横行するようになっていた。この時期のアメリカは，先にのべたように，人間不信，自己中心主義，裏切り，体制順応主義が支配していた。このような状況下で，人間を非人間化する体制にもっとも頑強に，そして組織的に抵抗してきた歴史を持つアメリカ共産党——「兄弟愛団」—

—の非人間性や，裏切りを，一黒人の運命とのかかわりで提示することは，いかにも時宜にかなっていたといえるだろう。つまり，エリスンは，かってみずから NM で強調していた1930年代の黒人の民衆体験の文学的普遍化という課題からはなれて，マッカーシー旋風によって代表される50年代にふさわしい兄弟愛団と「私」とのかかわりを描きだしているわけである。

たとえば、作品の最後で，「私」が冬眠からめざめて，「社会的に責任ある役割を演じる可能性」があることをのべている部分で，この「社会的に責任ある役割」が，エリスンが別のところでいっている「合衆国憲法とその修正条項の神聖なプリンシプル」と，どのようにかかわるのかあきらかでないばかりか，兄弟愛団との対決がその主要な「責任ある役割」であり，「倫理的責任」をとることになるという印象さえあたえるのである。この印象は，エリスンが1944年，つまり NM からはなれて１年後に書いた文章をよめば，印象以上の確信に近いものになるはずである。

1944年にエリスンは，スウェーデンの経済学者グンナー・ミュルダールの『アメリカのディレンマ』というアメリカ研究報告の書評を書いた。これはかなり長文の批評であるが，結局公表されず，評論集『影と行為』(1964) に収録されている。この書評のなかで，まず注目しなければならない第一は，アメリカの左翼の黒人問題とのかかわりについての言及である。アボリショニズムの時代以後，アメリカの左翼と「ニューディール」が黒人問題に大いに関与してきたことと，その民主主義的な方向性を評価しつつも，両者ともイデオロギーに裏打ちされた計画性をもたなかったことが致命的であったとし，その顕著な例が，「ニューディール」政権下の人種差別を容認した軍隊であり，それを共産党が支持していたことであると批判している。これに関して，エリスンは「赤の裏切り」の例というよりも，そもそも「誠実さは政党に期待するものではないのである。革命的な政党にしても同様だ」と断言している(45)。

エリスンがこの書評のなかで，ミュルダールの著書の分析からはなれて，「ニューディール」と共産党とを批判し，「革命的な政党」にたいする不信感をむき出しにしていることと，『見えない人間』において，兄弟愛団が「道化」に

まで戯画化されていることとは，無関係ではない。しかし，エリスンのこのアメリカ共産党批判（また兄弟愛団の戯画化）については，彼のために少し弁明しておく必要があるだろう。というのは，エリスンが批判しているアメリカ共産党は1940年代前半，アール・ブラウダーの指導により，第二次世界大戦――ナチス・ドイツや日本帝国主義にたいする戦争を勝利にみちびくために，「完全にして全面的な運動のために巨大資本家をふくむ全国民を団結させ」なければならないという方針を決めた[46]。それにもとずいて「ニューディール」に「協力」すべきというよりも，それを「支持」しなければならなかったのである。このようなアメリカ共産党の方針は，NM にも影響をあたえていた。たとえば，1943年に NM の「読者の声」欄には，共産党指導者 E. ブラウダー批判の投書がのっている[47]。これは1カ月前の NM に掲載されたブラウダーの論文にたいする投書であり，つぎのような主張をしていた。「ブラウダー氏は，そこで共産党の唯一の目的は，（戦争の）勝利のため，平和な世界のため，もっとも巾広い民主主義のためにたたかうことだといっているのだ。あきらかに自由主義的プログラムだ。なぜならそこには，革命についてはもちろんのこと社会主義についての言及はなに一つないのである」。たしかにこれはブラウダーを批判しているが，同時掲載されている他の2つの投書は，ブラウダー擁護の内容であり， NM としてブラウダー主導のアメリカ共産党，エリスンのいう「イデオロギーに裏打ちされた計画性をもたない」共産党の方針にたいして，明確に批判的であったことはなかった。1945年6月に，ブラウダーの方針がアメリカ共産主義政治協会の大会で否決されたときも，ブラウダー批判を活発に展開することはなかったのである。このような弱点を，この時期の NM とアメリカ共産党はもっていたのであった。

つぎに，この書評では，ミュルダールが「階級闘争の概念と反ニグロ偏見の経済的動機」[48] を無視していると非難されていることである。これは，ミュルダール批判をつうじて，当時，「階級闘争」や「革命」や「社会主義」を放棄してしまっていたアメリカ共産党にたいして，エリスンが批判的であったことをあきらかにしている部分である，と考えてよいだろう。しかしながら，その

後エリスンは『見えない人間』において，「階級闘争の概念と反ニグロ偏見の経済的動機」の無視というミュルダールと同じ誤りをおかしている，と指摘しているスタンリー・E・ハイマンの批判の正しさもみおとしてはなるまい[49]。つまり，『見えない人間』では，エリスンがNMの時代に一貫して主張していた「マルクス主義的人間観」「労働者階級の意識」や「階級闘争の概念」等が欠落しているだけでなく，それらが戯画化や「道化」の対象にされているのである。そうすることに，エリスンは作家としての「倫理的責任」を見いだしているのである。この点で，この作品が，高く評価されたといってよいが，その他にも，「科学的な判断よりも，文体上の工夫による」[50]というエリスンのミュルダール評のなかの言葉を，『見えない人間』評価にそのまゝ使うことができるだろう。だが，全体として，「その肯定的な貢献は，今日では，それらの否定的要素よりもたしかに大きい」という評言[51]——エリスンがミュルダール評の最後の部分でいっている言葉——をこの作品に与えることはできないのである。

(六)

エリスンが，このような「倫理的責任をとろうとすることへの回帰の試み」の，わずか一篇の長編小説を発表しただけで，著名な黒人作家としてアメリカ内外で異常に高く評価されているもう一つの理由は，彼が小説を書くかわりに，得意の巧妙な饒舌でもって，自己宣伝につとめていることであろう。

たとえば，彼のNM体験についての饒舌をきいてみよう。最初の評論集『影と行為』のなかでは，こんなふうにいっている。その時期，彼は，リチャード・ライトにすすめられて，コンラッド，ドストエフスキーやヘンリー・ジェームズ，ジェームズ・ジョイスなどを読んでいたので，「黒人体験のイデオロギー的解釈にはあまり関心はなかった」[52]。「ライトはイデオロギーに深入りしすぎていたが……私は社会的決定論者ではなかったといってよい」[53]等。さらに最近出版された『インディアン地区に行く』という単行本では，「記録は公に

されているので，気がつくだろうが，私は公式的な小説は決して書かなかった。黒人のたたかいを書かなければならなかったので，プロパガンダといわれるようなものは書いたが，私の小説は，つねになにか別のもの，リチャード・ライトの小説ともちがったものであろうとしていた。私は，ニュー・マッシズが作家に課そうとしていたイデオロギーを決して受容しなかった。連中は，ドストエフスキーを嫌っていたが，私はドストエフスキーを学んでいたのだった」(54)。エリスンはこのようにのべて，NM 時代の彼の思想的・文学的独自性ないしは卓越性を強調している。これが正しいかどうか，本稿でも，すでに「記録は公にされているので」わかるように，当時のエリスンの思想的・文学的立場は，いちじるしく階級的，「民族的」で，「NM のイデオロギー」を代表する作家の一人であったのである。これは，エリスンが，NM の文学担当の主要なメンバーとして，活発に執筆活動をおこなっていたことからも当然考えられるだろう。エリスンが，得意の饒舌と自己宣伝によっていかに彼の独自性を強調してみても，この事実を消すことはできない。しかしながら，彼が自信ありげに，巧みに自己の独自性を誇示することによって，権力側にとって好ましいイメージを創りあげてきたことを否定することはできないだろう。

つぎに，黒人作家のアイデンティティにかかわる問題についての饒舌をきいてみよう。『インディアン地区に行く』(55) のなかで，彼の家に南部出身の黒人女性のメイドを雇ったが，仕事をサボるので首にした事件についてしゃべっている。この事件について，彼の友人がこんなふうなことをいった。「彼女（南部出身の黒人女性のメイド）は（君の家にある）本や家具や絵をみて，君がどちらかというと白人だ，と判断したのだ。黒人であるはずがないとね」。これと関連したもう一つの体験として，エリスンがバード大学で教鞭をとっていた時の体験をのべている。ある時，一人の黒人女子学生が，彼の友人の白人教師のところにきて，「このエリスンさんは黒人ですか」とたずねたという。エリスンは，この大学で「アメリカ文学」を教えていたので，その黒人女子学生は知っていたはずなのに「いまだにわけがわからない。どうもその学生は友人をかついでいたような感じだな」といっている。だが，エリスンは女子学生の質

問が「わけがわからない」のではなくて，よくわかっていたはずだ。その当時は，ちょうど黒人の公民権運動が全米的に高揚していた時期であった。マーティン・ルーサー・キング牧師が，公民権運動と平和への貢献によって，ノーベル平和賞を受賞（1964）し，また「アフリカ系アメリカ人統一機構」を結成し，黒人民衆のなかで組織を拡大しようとしていたマルカムXが暗殺（1965）されるというような時代であった。ニューヨークにあるエリスンの住居の近くでも，しばしば運動のための集会がもたれていた。しかし，エリスンは，地下にいる『見えない人間』の主人公のようにまったく姿をみせなかった。そのかわり，たとえば，1965年，ジョンソン大統領が主催したホワイト・ハウスでの芸術祭には出席するというような「黒人」作家であったのである。ちなみに，エリスンは，その芸術祭に出席しただけでなく，それへの出席をベトナム戦争反対の立場から拒否した著名な白人詩人ロバート・ローウェルを非難して，こんなふうにいっている。「大統領は，ローウェルに詩の書き方を教えようとはしていなかったし，ローウェルは大統領に政治の動かし方をおしえるような立場にはないと思う」[56]。そしてさらに，そのジョンソン大統領を，リンカーンやルーズベルトその他の大統領がなしえなかった黒人のための全面的な統合に尽力した偉大な人物である[57]とたたえて，ジョンソンのベトナム侵略戦争政策を擁護したのである[58]。

エリスンは，黒人や白人民衆の公民権運動やベトナム侵略戦争反対の運動には背をむけ，それを抑圧する権力側にあからさまにコビを売る「作家」になっていた[59]。こんなエリスンに，先の黒人女子学生の質問はむけられていたのである。もしエリスンが，真実，それさえも「わけがわからない」というのなら，それこそ彼には，もはや黒人作家としてのアイデンティティはなく，したがって，彼が「合衆国憲法とその修正条項の神聖なプリンシプル」とか，「民主主義にたいする作家としての倫理的責任」などと高言する言葉は，空虚にひびくだけである。エリスンは『ニュー・マッシズ』時代のすぐれた黒人作家・批評家としての栄光をなくしてしまい，いまや年老いた道化――しかも顔を白く塗った口の軽い道化になりさがっている，といっていいだろう[60]。

〈注〉

(1) Robert A. Bone, *The Negro Novel in America* (Yale Univ. Pres, 1965), p. 212.
(2) Herbert Hill, *Soon, One Morning* (Alfred A. Knopf, 1963), p. 18.
(3) ibid., p. 4.
(4) Robert A. Jelliffe, (ed.). *Faulkner at Nagano* (Kenkyusha, 1956), p. 171.
(5) Ralph Ellison, *Shadow and Act* (Vintage, 1964) p. 104.
(6) ibid., p. 102.
(7) James Baldwin, "Everybody's Protest Novel", in *Notes of a Native Son* (Bantam, 1955), p. 16.
(8) Ellison, op. cit., p. 106.
(9) Ellison, op. cit., p.p. 104–105.
(10) Baldwin, op. cit., p. 17.
(11) Robert G. O'Meally, *The Craft of Ralph Ellison* (Harvard Univ. Press, 1980).
(12) Ellison, op. cit., p. 151.
(13) O'Meally, op. cit., p. 30.
(14) ibid., p. 33.
(15) ibid., p. 68.
(16) ibid., p. 33.
(17) Robert G. O'Meallyのリスト。

Fiction
"The Birthmark." 2 July 1940.
"Mister Toussan." 4 November 1941.

Literary Essays and Reviews.
"Practical Mystic." 16 August 1938.
"Ruling-class Southerner." 5 December 1939.
"Javanese Folklore." 26 December 1939.
"The Good Life." 20 February 1940.
"TAC Negro Show." 27 February 1940.
"Hunters and Pioneers." 19 March 1940.
"Romance in the Slave Era." 29 May 1940.*
"Anti-War Novel." 18 June 1940.
"Stormy Weather." 24 September 1940.
"Southern Folklore." 5 November 1940.**
"Big White Fog." 12 November 1940.
"Argosy Across the USA." 26 November 1940.
"Negro Prize Fighter." 17 December 1940.

"Recent Negro Fiction." 5 August 1941.
"The Great Migration." 2 December 1941.
"Native Land." 2 June 1942.
Essays and Speeches on Politics and Culture
"Judge Lynch in New York." 15 August 1939.
"Camp Lost Colony." 6 February 1940.
"A Congress Jim Crow Didn't Attend." 14 May 1940.
"The Way It Is." 20 October 1942.
* 28 May 1940の誤り
** 29 October 1940の誤り

(18) Drake De Kay. "The Color Line." *The New York Times Book Review*, 24 August 1941.
(19) Addison Gayle, Jr. *The Way of the New World* (Anchor, 1975) p. 193.
(20) Bone, op. cit., p. 139.
(21) Walter B. Rideout, *The Radical Novel in the United States*, 1900–1954. (Harvard Univ. Press, 1956), p. 261.
(22) Peter Monro Jack, "A Tragic Novel of Negro Life in America." *The New York Times Book Review*. 3 March 1940.
(23) Harvard Sitkoff, *A New Deal for Blacks* (Oxford Univ. Press, 1978), p. 72.
(24) O'Meally, op. cit., p. 39.
(25) Ellison, "Stormy Weather", NM. 24 September 1940.
(26) Katherine Woods, "A Negro Intellectual Tells His Life Story." *The New York Times Book Review*, 25 August 1940.
(27) Oswald Garrison Villard. "The Negro Intellectual.", *The Saturday Review*, 31 August 1940.
(28) Richard Wright, "Forerunner and Ambassador.", *The New Republic*, 28 October 1940.
(29) Ralph Ellison, *Going to the Territory*. (Random House, 1986) に，"I had studied with creative musicians, both classical and jazz, and had been taught to approach the arts analytically" (p. 203)，また，"I assure you that he (Richard Wright) knew very little about jazz and didn't even know how to dance. Which is to say that he didn't possess the full range of Afro-American culture (p. 208). とある。 Ellison の音楽的才能がたいしたものでなかったことは，彼が New York に出てきたときの体験が証明しているが，80年代になると， Wright の弱点を大きくとりあげ，自己の宣伝に利用するまでになっている。
(30) Ellison, "Mister Toussan.", NM. 4 November 1941.
(31) Ellison, "Practical Mystic.", NM. 16 August 1938. これは Arthur Huff Fauset,

Sojourner Truth: *God's Faithful Pilgrim* (North Carolina Press, 1938) の書評である。このなかで Ellison は次のように書いている。"The book comes at a time when there is a national resurgence of interest in the Negro's revolutionary past, and it fills a gap in our too meager knowledge of the history of almost one-tenth of the American people."

(32) W. E. B. Du Bois, *The Black Flame* (1957–1961) や John O. Killens, *Black Man's Burden* (1965) 等には，その明確な文学的課題が提示されている。

(33) Arna Bontemps, *Black Thunder* (1936), *Drums at Dusk* (1939). ともに黒人奴隷の解放のたたかいを描いている。

(34) NM, 25 November 1941.

(35) Ellison, "Judge Lynch in New York." 15 August 1939.

(36) *Labor Fact Book*, 5. (International Publishers, 1941), p. 206.

(37) Sitkoff, op. cit., p. 258.

(38) ibid., p.p. 64–65.

(39) *Labor Fact Book*, 5. (International Publishers, 1941), p. 207.

(40) John O. Killensは，こんなふうに書いている。We are a Southern country, fundamentally. At least for me, Macon, Georgia, where I was born, is "Down South," and New York City, to which I escaped, is "Up South,"…… *Black Man's Burden*, (Trident Press, 1965), p. 57.

(41) Ralph Ellison, *Invisible Man* (Penguin, 1952), p. 32, p. 156.

(42) ibid., p. 379.

(43) ibid., p. 403.

(44) Irving Howe, "A Negro in America.", *The Nation*, 10 May 1952.

(45) Ellison, *Shadow and Act*, op. cit., p. 310.

(46) W.Z. フォスター『アメリカ合衆国共産党史』(大月書店，1954), p. 582.

(47) NM, 16 November 1943.

(48) Ellison, *Shadow and Act*, op. cit., p. 314.

(49) Stanley Edgar Hyman, "Ralph Ellison in our Time." in *Ralph Ellison*, ed. John Hersey (A Spectrum book, 1974). p. 42.

(50) Ellison, *Shadow and Act*, OP. Cit., p. 314.

(51) ibid., p. 317.

(52) ibid., p. 15.

(53) ibid., p. 16.

(54) Ellison, *Going to the Territory*, op. cit., p. 294.

(55) ibid., これに収録されている約半数が講演，対談等で，「評論集」という範ちゅうには入らない。「饒舌集」といった方がより適切であろう。p. 304.

(56) ibid., p. 292.

(57) ibid., p. 77, p. 292.

(58) Ernest Kaiser, "Negro Images in American Writing", in *Twentieth Century Interpretations of Invisible Man*. (ed. John M. Reilly, A Spectrum Book, 1970), p. 111. ニューヨークのハーレムにある Schomburg Center for Research in Black Culture で貴重な仕事をしながら，批評を書いている E. Kaiser はこのなかで，エリスンを次のように評している。Ellison has become an Establishment writer, an Uncle Tom, an attacker of the sociological formulations of the civil rights movement, a defender of the criminal Vietnam war of extermination against the Asian (and American Negro) people……

(59) エリスンは，『見えない人間』を発表して2年後に，*The Paris Review*, 1955年春季号のインタビューで，1930年代の活動についてのべているなかで，「この時期の大多数の社会的リアリストは悲劇よりも，社会的不正に関心をもっていた。私は，その頃も，現在も，第一の関心事は，社会的不正ではなくて芸術である」と断言している。1954年に，連邦最高裁が，公立学校における人種隔離に違憲の判決をくだして，社会的不正にたいする関心が全米的にたかまっていた時期の発言である。Ellison, *Shadow and Act*, op. cit., p. 169.

(60) これは1981年度文部省在外研究（長期）の研究テーマの一つであり，黒人研究の会（神戸市外大）1984年4月の例会で発表したものをベースにした。